

に気付く。「時空は物が存在するから存在する」というのは驚くべき認識である。

また、常に変化する実相だけでは現代人は生きていけない。時空の制約条件を克服できる仮相が必要である。実相だけだと「変化に始まり変化に終わりカオスの域を出られない」。蓄積がなく進歩が見られない。言葉の意味、紙幣の価値、ラングとパロールのラング、音楽や絵画の意味、あらゆる学術など、時空に依存しないものはすべて仮相である。それ故、時空に依存しない法則や定理などは普遍的であると言われる。

一方、誤解も仮相である。ところで、正解は普遍性を持つが誤解は持たない。誤解は時空の制約条件を克服できないからである。それ故、誤解は自らの存在を確保するため、気に入らない正解を巧妙に排除しようとする。1 mmSv以下の線量を要求する人は、科学的事実を主張する科学者を排除してきた。似非学者はそれに迎合して軽薄にも権威ある学識経験者を否定してきた。

アンカー効果などによる誤解の特徴はもうそれなりに理解できた。では、誤解を制御できる方法は何か、誤解を持った人の側に立った工夫が必要であるが、これこそ“**誤解の研究**”の重要なテーマである。

4. 心理におけるエネルギー最小化原理

力学によれば、風に揺れる木の葉はエネルギーを最小化するように運動する。同様に、脳の働きも労力（エネルギー）を最小化するように機能するのではないか。

人は何かを理解しようとするとき脳が対象に作用する。その時イメージは重要な役割を果たす。これは瞬時に把握されるからシステム1である。システム1が働くとき脳や心はほとんどエネルギーを使わない。

人の顔の印象を言葉で説明するとどういう事態になるか。目は大きい、鼻は高い、肌の色はつやがある、・・・このように延々と説明していてもAさんの顔を正確に印象づけられない。瞬時に働くイメージにはかなわない。これは長い年月をかけた進化の結果で「最小化原理は運動だけでなく認知作業にも当てはまる」例である。以上の理解をまとめてみよう。

1) 自然現象が**最小化原理**から導出できるように、目標達成のための行動は“**効率と効果**”を重要な指標とする。それは時間的・空間的制約条件の克服になっているからである。効率は時間的、効果は空間的要素である。これが心理状態にも適用できるか否か。物理的にも心理的にも制約条件を克服したものが、目前の“**秩序ある現実**”である。ウィトゲンシュタインの“**論理空間**”は洞察に富んだ“**世界の理解**”である。

2) “**誤解**”に繋がる心理現象は脳の働きに必要な労力を最小化する原理に適っている。システム1は直感的認知でほとんど労力を要しない。生きていくには無数の認識が必要であるが、誤解もその一つである。それを直観的行わなければたまったものではない。

3) しかし、「急いては事を仕損じる」ように、少し複雑な事柄を瞬時に理解しようとするすると誤る確率が高くなる。誤解される対象（放射線は怖い）が人のアンカーと共鳴しあって心に定着するからである。日本人の年間自然放射能の被ばく線量は1.4 mmSv。福島では多くの汚染地域の線量は1 mmSv 以下。福島以外の地域と変わらないレベル。それでもひとは帰還しない。誤解のもたらす典型的な帰結であろう。帰還問題は既に科学的問題ではなく、打算的な社会問題になっていないか。

心理学実験によれば、**脳は単純なものを好み複雑な思考を嫌う**。また、原発報道が量を見失っているように、人は**数値**といった**定量性**を本能的に嫌う。このような性癖がアンカー効果や後光効果をもたらしている。

このことに関連して面白い記事が産経新聞に掲載された。4月20日の“正論”である。「取り戻すべき『歴史認識』の本質」という長谷川 三千子氏の寄稿である。同氏は古代ギリシャの歴史家ツキディデスの例を引きながら「**真実究明をいとうなかれ**」の小見出しの中で、歴史認識の誤解について、「**大多数の人間は真実を究明するための労力をいとい、ありきたりの情報にやすやすと耳をかたむける**」というツキディデスの言葉を引いている。

趣旨は中国、韓国の一方向的な政治的言いがかりの批判にあるが、これはまさしくシステム1にとどまれば最小化原理のもとで“誤解”が生じることを述べている。こういう視点から見れば、中国と韓国の主張は誤解に基づいた言いがかりだということがより一層明確になる。両国はシステム2に基づいて客観的な『歴史認識』をして欲しいものである。日本国民もそれに気づくべきである。

5. 結 語

たまたま、今話題の「近藤麻理恵著：人生がときめく片づけの魔法、サンマーク出版」を読む機会があった。この本は世界的なベストセラーだそうである。そこには瞠目すべき視点があった。彼女は言う「本来片づけで選ぶべきなのは、『捨てるモノ』ではなく『残すモノ』です」と、さらに言う、「モノを一つひとつ手にとり、ときめくモノは残し、ときめかないモノは捨てる」と。

誤解をモノに置き換えたらどうなるかである。『捨てる誤解』は当然として『残す誤解』はあるのかと。誤解の中に『ときめく誤解』はあるのかと。1mmSvは科学的には間違っていないが、心情的には正しいのではないかと。“誤解”が真に研究対象になりうるのであれば、この視点は欠かせないのではないかと。単なる“片づけ”に哲学的色彩をもたらした若い著者に敬意を表したい。「誤解の研究」もこうあるべきではないか。

(宮 健三 記)

“誤解を生むしくみ” = “早い思考”

直感的に正しいと思われる判断も、
誤った論理のシナリオで補強される

アンカー効果：福島原発事故と反原子力

後光(ハロー)効果：権威のある人が言う信じてしまう。
原爆による後光効果。

ブライム効果：無意識に誘導される。
「食べる」という言葉を目にとると、
{SO?P}の？を{SOUP}と答えやすい。
福島で放射線をあびたと聞き、
ガンが増えたと聞くとその通りと思う。